
夢奇出るの誌

くら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢奇出るの誌

【Nコード】

N0227K

【作者名】

くら

【あらすじ】

ある時期にみた夢の話を繋げてみました

珪藻土は雨に匂いを混ぜている、暗闇で聴きながら鼻は先に起きる、目蓋は最後、湖底から両手を掻い出す様に布団を剥いたら身体が浮く、暗中を低く泳ぎ地面を僅か下に感じながらガラス戸に指先が触れる。水性のガラス戸を戦慄かせて温められた雨戸を開く。部屋の皮膚が開かれて光が中に差し込む。僕は地に足をつける。

駅を降りると街の色は抜けていた、空だけ青い。一步足を前に出す。止まる。車の音もない。黒白の淡い色で道は延びている、ロータリーにも車は無かった。遠くに有る大きな鳥居も黒く、図書館も色を忘れている。構わない、文字に色は格別必要無いから。

バス停で待っているのにバスは来なかった。時刻表を見ると……驚いた。で、僕は歩くことにした。色の無い街は春でも秋でもないのに穏やかで暖かく温められた空が青々と降っている。気分が良かった。黒い木々が鉄柵を乗り越えて道を段だらにしている。光の明滅をすいすい泳ぎながら進むとようやく人を見かけた。老人??チャックから一物が出ている……。門の中を放心しながら見つめている。一物は大人の太い腕よりも太い、先から灰色の水がほとばしっている。音が耳の穴を痛めつける。汚い老人だった。僕はその道を避けて、車の無い道路を横断した。渡るとき、葉の傘が切れて青空がまともに降った、僕は笑う。進みながら横目で見ると門の中は洋式の墓だったのを知る。

鉄柵は続く、両側の墓から木々の黒い葉が道を侵す、不埒な早さで足を動かし、僕は進んでいく。と、声をかけられ顔を上げた。白髯が見えた、年の離れた友人だった。何年ぶりの出会いだったか、道で偶々会うなんてと会話を始めると際限なく続く間柄、話を切り上げてそろそろじゃあまた会いましょうと言うや予定はいつ空いているのと言い出して話は再び盛り上がる。多くを知らながら決し

て語らぬ徳があり人に併せ人を導く、この老翁に僕は屢々世話になった。学生の衣を脱いでからも請うたら相手をしてくれていたものだが、この数年でとんと無沙汰をしていたのだった。唐突に、彼の顔が曇った。鯁えた臭いがした。見ると、汚い年寄りが二人の間に入ろうとしていた？？まだ一物を出したまま、その男は憤怒を眼内から吹き出している。老いたうえ醜かった。一物からは雫が垂れていた。地面に擦る程の大きな生白い芋虫。見て見ぬ振りをしただろ、と嘔む様に言う。

「見て見ぬ振りをしただろ」

男は怒りを皮膚の中へもぞもぞと入り込ませていった。骨と皮の間に鈍色の液体が音を立てて流れ込む。細胞の隙間が広げられて核が歪み、細胞壁の色が変わる……（赤い）……そうして皮膚は毛穴からじりじりと液体を垂れさせる。

「馬鹿野郎！」

頼もしい僕の友人が傘を振り上げて恫喝した。醜すぎる老人は一步足を退けた様に見えたが、それは僕に怒りをぶちまける為の予備動作、赤味の差した亀頭がぶらりと揺れて僕に両手をあげてガア……と、僕は慌て逃げ出した。図書館とは反対方向に逃げていた。咄嗟に飛び込んだのは墓だった。

石の羅列は静かだった。僕の足音しか聞こえなかったが、ぶるぶる震える陰茎の音は耳内で反芻した、出ては、入り。僕は飛び出した。いつかヤギの様に両手を変えて墓の上を飛んで広大な？？森のような墓を逃げ続けた。突然の崖も僕は気が付かなかった。

滑る。黒い葉に擦り、石が打ち、落下感が遂にやって来た。落ちている。地面が近い。当たる。脳が割れる。彼は耳を触る。彼は「これが耳だよ」と言う。それは面白い言葉のつもりである。僕はその砕けた顔を見て自分が落ちたことを不憫に思う。

五体はほとんど砕けていた。遠くで白い火が立った。その上に暗い影がはたみいて、僕は彼女に気が付いた。だから弁解の微笑をしている。青冷めた不純な白い氷の服、そうではない白い手、美しく

覚えられない顔の少女だった。どうしたの、その人？ と彼女は呟いた。僕は笑っていた、彼の最後の言葉に敬意を表していたつもり。「死んでるの？」

そうですよ。

「アザラシみたいな顔」

人々が、次第に集まり出してくる。戸から顔を覗かせて、無言だが目で千万言、僕はうるたえる。四、五人……十数人。少女は振り返る。黒い髪の緑の光、僕は慌ててそれを追った。追うなり、彼女は走り出した。

黒い鳥居をくぐると図書館だった。

壁一面の本、濃緑の背表紙、皮表紙、黄、赤く太い背中、金の文字、文庫本、巨大な煙突の中に入った気分だった。本の巨壁で閉じられた館に少女は苦もなく泳ぐのに、僕は背が足りない。

「背が足りないよ」

「そうね」

ところで、ここで働いてみない？

「僕は本を借りに来たんだけど」

「なにを？」

「本……」

彼女はもう行ってしまった。床は板だったが、分厚いニスで固められている、二センチはある。僕の足音はしない。

「借りられるだろ？」

「貸せるけど、返してもらっわ」

「いいけど」

「なら借りたら良いわ」

僕は本の暗がりの中に案内された。少女の手は蛇の様に長く光り、瑞々しく揺るぎ、乾いた本はその水気に当てられて音を鳴らす、背表紙は少しも色が変わらず、ただ徒に水を吸う、彼女の肌は増々透明度を増し濡れている、水が滴り始める直前でひやりと揮発する

のを見せると僕と本棚を指さした。僕の気に入りの作家達のまだ見ぬ著作や見つけ難い本が並んでいた。アレ、コルタサル、足穂、プラトン、ハイヤーム、キーツ、古事記、イエイツ、フーコー、陶淵明、牧野信一、ルナール、川端、ワーズワス、サド、鏡花、ジユネ、マンディアルグ、ポー……。遠くに見えるのはベリー公のいと豪華なる時祷書、すぐ手元にはカルメル修道会に入ろうとしたある少女の夢。

僕は選り兼ねた、どれも読んだものばかりだったし、それでいてまた読みたいものだったから。ダンセイニ、ハインライン、ボルヘス、ヴァーツァーヤナ、クレランドー、石燕。どうしよう。彼女は心得た様に一冊の文庫本を手にとった。

「これ」

「それは？」

水辺に三人の若者がいる。彼等は仲がいい、良いにも関わらずお互いのことに警戒を怠らない。短剣を隠し両目とも視力を恐ろしく悪くして付き合っている。三人の盲いが短剣を隠して春の昼に遊んでいるようだ。二人の男、一人の女。ボート。鮮やかな昼だ。三人はボートで寝そべっている。川上から何かが流れて、船底にあたった。ボートから川藻のように見えるものが揺らめく。川上から叫ぶ人の声。船底に引つかかったのは女性に違いない。彼等は助けようと思いつながら、何故かそれが出来ない。彼等は船の上で、船底にひっかかった女性の死体をそれぞれ感じている。やがて、船底の動きが止まる。一人が突然立ち上がり、それで……

それは僕がもっとも読みたかった小説だ。確かモーパッサンだった気がするのだが、どこを探しても見当たらない。彼女の指はちょうど作者の名前を覆っている。

「どうして？　僕はそれを……」

何度も読んでいるからじゃないかしら？

彼女はそう言った。僕はそう聞いた。そして僕を超えた“僕”らしきものが天空の屈折に何度も同じ本を借りては返す僕を漂わせた。

恥ずかしくなった。僕は何度も同じ本に同じ様に感動して返却している、そして再び借りている。

「貸す、からには、返してもらおうから」

彼女はそう言っただけで、見上げがちに笑った。

勿論、与えることも出来るんだけど。

「その分には働いてもらわないといけないのよ」

「どうすればいいの？」

どこにあつたのか、彼女は扉を開いた。ノブから扉が生えたのだった。

無数の本があつた。本は地面を覆い尽くして有機体の様にうねっている。少女達がいる、裸だ。割れそうな胸板に潰れそうな小さな腹、気の毒なつやつやした腕、ひよろりとはえた小さな足。彼女達は本の間に潰け込まれていた。本達に身体を添わせて寝そべっている。

身体から香気とともに液体が溢れる。そうすると古い本に潤いが戻る。少女達は古い王達に自らの水気を与える為に駆り集められて来た土中の木の根を住処とした無垢の半人だったことを、僕は唐突に思い出し……いや、彼女の手が僕に触れてそれを思い出させた。

「私達の仕事はこれよ」

少女が服を脱ごうとしていた。僕は慌ててそれを押しとどめた。とりあえず僕はここで働くことにする、だからちよつと待つて欲しい。

二スの上を走る。二階は遥かな高みにあつた。僕の背の何倍も高い所に二階はあつた、中心が吹き抜けで二階が良く見える。どうしようもない。僕が二階に上がれないのをまじまじと見ている僕と別の男。二階で本を整理している。彼は背が高く四肢が長い。それから年の数程髪が長くてそれと同じだけの丈のある黒い服をきている。全身が黒髪と洋服で覆われて、なお余る髪や布は地面に引き摺っている。下から僕はおろおろと見上げている。僕はそれを気の毒そうに見下ろしている。

十メートル、いやもつともかもしれない。二階はあるのに、二階に上る階段はない。司書は二階でせつせと本を片付けている。彼に会わねばならない。心中がぐるぐる渦巻く。あの濃緑に光る二階に上がらねばならない。

僕は部屋を中心にいた。真球の連鎖の中心にいる如く。

「階段は下から行くのではない、上から来るものだ」

本を携えた男がそう言った。

彼は陽のささないところに立っている。

仙人掌の森にいる、ウチワサボテン、コノハサボテン、ウバタマサボテン、ゲツカビジン、肉厚のもの、棘の多いもの、ビリジアン、エバーグリーン、緑色、あらゆるサボテンが隙間も無くある。男の身体は埋まっている。動けば棘は彼を刺す。それを貪る四つ足の肌の荒い生き物の透明な黒い目玉の虹彩は眩しく、てんでに光を受容するロッドの中から思考は一つも浮かび上がらない、秘密の「お静かに」だけしか居ない、サボテンを貪り食うだけ。緑色の肉が割れる。

濃緑に輝く天井から黒い物が見えた。四角く黒い物が天井から降りてくる、ゆつくり、すごく大きい、天井が見えなくなる程の大きな黒い『板』のようなものだ。板は縦になって、斜めになり、僕の方へ降りてくる。少女がその『板』の壁にしゃがんでいる。僕とは違う重力が働いている。彼女は手を伸ばす。僕は恐れている。音は無い。ただ恐ろしく揺れている。黒い板は増々僕に迫る。僕は恐れしている。音は無い。動こうとはしない。少女は手を伸ばす。僕は恐れたまま手を伸ばす。死ぬのだろう、と思った。音がしない。少女に引き上げられて、黒い板は僕を二階へと繋げる。

僕は、勿論、まずはそう、面接だ……。ある部屋に通された。椅子に座り、暗い室内の匂いが倉庫だろうと思わせる。裸電球が恐ろ

しく高い所についている。暫く待っていると僕がやって来た。僕はひどく自信なさげだった。部屋は薄暗く、裸電球は高い所にあった。僕は僕の前に座らされた。僕はまず名前や職歴などを聞いた。僕は聞かれるままに答えながら、あれは本当に僕だろうか考えた。僕は他に質問する項目を知らなかった。ただ、彼を見つめていた。彼はいぶかしげに僕を見つめている。僕は疑われているようだった。僕は僕の小さな動きにまで何かを感じようとしていた。僕は僕の言葉を待った。言わずにすれば良いし、いや、いっそ言わせてしまおう。

「認めてもらえませんか？」

「認める？」

そうして僕は働くことになった。

少女達は若くして死んでしまう。いつも濡れていた身体は段々ギリギリした銀製の水気に変わって目はあかず口もきけず、四肢は萎える。僕はそれを土中に戻す仕事ではなかった。夜中の警備を任されていた。無数の階段（いつのまに出来たのだろうか？）そして部屋、木造のものさえある数多くの部屋を見て回った。大抵は何も無いうちに回り終えてまた定時に回り始める。階段を上っていると学校を思い出す。材質は学校で使っていたアレと同じだ、リノリウムに大理石を混ぜたような不届きな重い石。僕は昇りながら幾つかの声を聞いた。まだ元気な少女達の声だろう、彼女達は白いワンピースを着て本の壁を自由に歩いた。僕はそれを見ている？？いけない、仕事をしないと。階段を昇りきると突然、暗さが澱んだ。インクの雨が降ったようだった。音速の聖母は部屋の中を轟々と鳴らした。僕は呼吸が苦しくなる。漆のような黒いものが階段に変わる。つるつるしている、そして暗黒だ。少女達は部屋に逃げ帰った。誰かが侵入して来たようだ。ふてえやつだ、たたき出した。僕は電灯を掴んで階段を駆け下りた。敵もさるもの、僕に気付いたらしく一歩先を逃がっている。階段を降りる。侵入者は更に先の階段を降りる。い

つまでも追い付きそうになかった。僕はあえて階段を駆け上がり、部屋の一つへ入った。そこには石膏像がおいてあったが、それはまだ石膏像ではない??惜しい!??まだヒュプノスの頭は途中までしか出来ていない、左半分は頁が露になっている。紙がまだまだ石膏に変わっていない。他の紙や本達は石膏のせの字も無い。仕様が無い、背に腹、だ……僕はヒュプノスを抱えて階段まで戻った。階段は螺旋状になっている……侵入者はその真ん中を通りかかろうとする。僕の手からヒュプノスは飛び立つ。地面で粉々に砕ける。

侵入者は見つかったか?

管理人が言った。

「逃げられてしまいました」

では追おうか、言いざま彼は飛び出したが、その素早さと言ったらなかった。僕はその背に巻く風に閉じ込められて走らぬのにも関わらず景色が変わって進んで行き、やがて歯車が狭く音を鳴らす所に來ていた。ひたすら上空に向かって二人は進んで行く。天井の低い所を這いながら上へ上へと昇って行くとやがて梯子が上から伸びている所に付く。毛糸で作った靴を履いているな、と彼は言った。つと、と胸をつかれた。二人は滲む汗を隠して階段を上りはじめた。空が見えた。薄ら開いた場所だった。スタジアムほどの広いスチールの広場だ。天井はすぐ僕の上にあるから相変わらず狭い感じはする。だが、四方はまったくの空だ。高い所独特のあの速い風が吹いている。気持ちが良い。

遠く下の地面に大きなカブトムシを見つけた。

その近くにはガラス窓がある。

窓の外には逃げる者がいる。

サボテンを食う獣が、全て決着を付けてくれる……。

「お静かに」

あれは機械仕掛けだと少女が教えてくれた。

僕は彼女とともに飛び降りた……途中で雨が降った……地下のライブハウスに着地。

そうして、僕は土中から生まれるカブトムシを摘まみ上げた。カブトムシは他の生き物に食べられずに成虫になつて外へ出て来たのだが、カブトムシが生まれた穴は少女が捨てられる穴と繋がっていた。その穴は幾つかの音響を響かせながら地下の底流に繋がっていると言う。僕は少女とともにその穴の中に入り込んだ。土中の穴は狭く身動きが常に制限されている、中へ入り込んだこともすぐにバレるだろうから追う者はいるはずである。恐ろしい追う者の音がしている。一人だが、彼は歩く術を持っているらしく聞こえるのは足音だ。這いながらいつまでも土中の暗闇は切れない。足音は着々と近付いてくる。長い地下はいつまでも終わらない。少女はいつか両手を痛めていた。僕もそうだ、だが、まだ終わらない。足音は近い。だがまだ捕まらない。

突然、川が現れた。どこまで深く降りたか知れない。川だ。彼岸が霞にも見えないほどの大河だったが、水は黒く透明で深い。見ると少女達が流され沈んで行く。僕達はその川に沿って歩いて行った。やがて見えた来たのは青冷めた航空機のプロペラだった。それに這い登り備え付けられた階段を上った。土中の川に少女達が泳ぐ様に古い人間は土の中へ死を隠すことを発明したが、その穴はあくまでも今の僕や土中の飛べない航空機に、就中土竜にとっては生活圏なのだった。

ただ僕達はいち早く外へ出た。光が土の皮膚を裂いた。青空があり、図書館があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0227k/>

夢奇出るの誌

2011年1月4日03時50分発行